
すかいそんぐす

くるっせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すかいそんぐす

【Nコード】

N5489R

【作者名】

くるっせる

【あらすじ】

少女の家族を想う健気な瞳は社会の渦に。

少女は渦の中心に立ち、光を放つことも許されぬまま。

序章（前書き）

駄文ですが、どうぞ、

序章

考えてみたら必然だったかも知れない。

有名女優を母に、有名俳優を父に持つ私にとって。

芸能界など、生活の範囲だったのかもしれない。

けれど、普通に過ごすことを望んでいた。

だから、普通に過ごすことに憧れていた。

でも、やっぱり。

こういう道を歩むんだなあ。私。

一般人に成れる筈が無かった。どうやってテレビの目が効く。
周りに友達が出来るとは少なくて。

なったとしても、利用されたり遊ばれたりするだけ。

普通に過ごしたかったなあ。

飛行機に乗って思うよ。

歌手だろうが女優だろうが、

空の上では一般人なんだね。

異国行きの飛行機で

もう二度と自分の足で踏むことのない母国の地を見て思うよ。

ねえ、みおん 深穩。

序章（後書き）

これから全てが始まるのです

一章、一部 違い花（前書き）

主人公と、重要メンバーの出会いです

一章、一部 逢い花

「hey hey 彼女可愛いじゃん？」

イツの時代の言葉だよ。と誘ってくるナンパ男を蔑む。

東京のと真ん中、こんなところを少女一人で出歩くなんて誘っているようにしか映らない。

私だって好きで歩いているわけじゃない。

人探ししているだけだ。

私の探している人は、白崎來歌^{しらいかが} という女優だ。本名は、萩原空頼^{はぎわら あきら} という。

三十を越えてなお世界を通じる大女優だ。真っ直ぐなストレートヘアに歳を感じさせない体。

ファンは減るところか、増える一方らしい。

しかし來歌には秘密が多すぎる。

連絡先も、住所も誰一人知らないのだ。

マネージャーすら知らない。収録の時には、何処からとも無く出てくるのだ。

私はその人を十年間以上探し続けている。

特に逢いたいわけではない。けれど見てみたい。

テレビや、新聞、街の電子掲示板やネットの中だけでなく実物を。

逢いたい。私の母に。

父も今も俳優業を続けている。けれど今は一緒に過ごしていない。

私は父方の祖父母に育てられている。いや、飼われている。

2人とも優しく、ときに厳しいという人だ。

しかし縁があるわけではない。父は捨て子だった。

だから私はいつ捨てられてしまうのかと、小さいころから怯えていた。

今もそんなことする2人ではないと頭では分かっているが、体が異常奉仕を尽くしてしまう。

まるで私は犬だ。

父方の姓を名乗っている私は、萩原ではなく斉藤だ。

下の名前は母の芸名の一字をとってかなか奏花という。

あまり気に入っている名前じゃない。奏でるというように娘にも芸能活動を期待した名前みたいで嫌だ。

斉藤奏花。私の名前だ。

母も父も記憶に残っていない。

父は年末年始などに家に帰ってきているらしいが、私の居るときは家にいない。

私が母に似すぎているせいで、昔の女を思い出させているのだろう。離婚しているわけではない。そもそも結婚すらしていない。

祖父母も父を気にしているのか父が居る時は家に帰ってこないよう注意された。

そんなこんなでもう9年直に会っていない父。

母は私を産んで間も無く音信不通になっただけ。

らしいもなにも、私には全く記憶にないのだからよくわからない。

母は私を産んだときまだ十代だった。一体何を考えて私を産んだのか。

きつと何も考えていなかったはずだ。

そのとき既に人気子役だったから、芸能界を、受験勉強をする、なんていう話で休業し、ラジオ出演などでしか活躍してなかったようだ。

よって、家族なんか知らない。芸能界は嫌いだけど、家族を作らなかった、作れなかった父に憎しみを抱いているわけで

もないし、

父と幼かった私を捨てた母に怒りを抱いているわけじゃない。記憶に残っていないんだから、別にどうだっていい。

けれど、逢って話をしてみたい。

少し母に触れてみたい。

理由なんて必要ないと思う。

だって母なんだから。

私の母なんだから。

そんなことを考えて東京の街を出歩き早5年。

一度も母に繋がる有力情報が手に入ったことは無い。

家から電車で3時間。毎日とは来られないので毎週土曜日限定。

今日もふらりふらりと練り歩く。

東京はこの国の中央とだけあって、人が多い。物も多い。

何より芸能人が多い。芸能人が日中こんなところをお歩きになっている訳ないとか普通は思っけれど

意外とお歩きになっているものだ。

というか私も芸能人とよく間違えられる。やはり母に激似なせいか、さつきも少しイケてるご老人に誤解され握手求められた。今の気品のある方も眼鏡を外し、手で目を、違った。薔薇の刺繍の入った高そうなハンカチで目を擦って、またこちらを見た。ご高齢の方には十数年前の來歌を見ている感じなのだろう。

母の過去の写真を見て自分でもびっくりしたくらいだから。

スカウトなんて日常だ。今日も指折り両手で丁度ぐらいの回数。

「あの・・・ちょっといいですか？」

背後からの声。またスカウトかと思いながら振り返る。

声をかけた人を見て、考えた。

声をかけられたらすぐスカウトと考えるのはやめよう。と。

明らかにスカウトマンではない容姿だ。

高校名が入ったどこかの部活のジャージ。男子高生だった。少し後方にチームメイトらしき数人の男子がいる。

「俺、WINSPRATIONスカウト、あかい みおん赤井深穂と言います。ウチの事務所、入りませんか!？」

まさかだった。こんな同い年か少し年上くらいの人にスカウトされたのは初めてだ。

深穂と名乗ったスカウトマンはガサガサと自分のスポーツバックを漁っていたが暫くして諦めたようにこっちに向き直った。

「すみません。名刺忘れてしまったらしくて……。でも、貴方を忘れません!というか、諦めませんから、今度事務所に来てくれませんか!?!この少し先にあるので!」

今度はバックからメモとペンを取り出した。さすがにそれくらいは入っているようだ。

スラスラと地図を描き始めた。私はここに連絡先を書けばいいのは。という疑問があつたが、

彼が熱心に描いているので言わないことにした。

「それでは、また!」

と、挨拶も程々に仲間の下へ帰ってしまった。

もちろん、いつもの私ならこんなところ行くはずもないが、メモと一緒にペンまで押し付けていったので

仕方ない。来週にでも行くことにしよう。

そうして、今日の東京人探しは終わった。

あつという間に一週間は過ぎるものでまた土曜日がやってきた。
一応、事務所に行くのだからメイクは軽くしていく。

母の顔に泥を塗るとか、そんなわけじゃないし、母なんて何度も言うようにどうでもいいけれど、

迷惑かけたくないかな。なんて。矛盾しまくりな私で。

先週のスカウトマンが描いた地図を元に事務所まできた。

見て吃驚。まるでお化け屋敷。元は綺麗な洋館だったのだろうけど、壁には鳶が生えて

屋根はところどころ落ち、鉄は錆びていた。

マンガみたいなことは起こるんだなと、これまたお決まりの言葉。

古びた扉を開けてみても、これまた期待どおり。

埃の舞った、広くて古い廊下。元は赤いカーペットだったらしい床は黒ずんで隅のほうにしか元の色の名残が無い。

壁にかけられたどこかの有名品らしい絵画が、またその雰囲気をもし出している。

きよろきよろと辺りを見回していると、一番近い右の緑の扉から、一人の少女が出てきた。

歳は、同じぐらいだろうか。真つ黒な髪が腰まで伸びていた。メイクは濃く、色の白い肌がより一層メイクを際立てていた。

少女はこちらをじっと見て、

「あなたが堺^{さかい} 依衣^{えい}？　こんなのが真亜^{まゐ}の新しいマネージャー？　ちよつと。何かの間違いじゃないの？

ちよつとアンタ。早くついてきなさいよ。真亜は忙しいの！ トップアイドルなのよ！？」

私の手をぐいつと引つ張つて、外へ連れ出す。随分と強引な子だ。いきなり誤解され、弁解空しく、スタジオへ連行された・・・。

スタジオに着いて、すぐ渡された出演者の名簿。

「真亜のマネジなんだから、それくらい覚えてよね。一時間あればたりんでしょ!？」

本当に無茶苦茶な子・・・。呆れながら、ざっと目を通した。ある人物を見て、口元が緩んだ。

白崎 來歌

あの人が、出るんだ。

ポーチに入った紅いペンダント。ガーネット。

母から貰った唯一の物。

母と私を繋ぐたった一つの。

私の手の上で濃く、強く光るモノ。その中の瞳。淋しげで、けれど意志の強い・・・。

母に会えるんだ。

「堺!もう出番なの!」

真亜は機嫌が悪い。タイミングが悪かった。弄んでいたペンダントに気付かないわけも無く。

「なに?それ。へー、ペンダント。なんの宝石かしら?」

そう言いながら、自身の首元に合わせ鏡を覗く。黒い髪の間、白い肌に咲く様な紅い華。

ガーネットは光っている。

「今日は赤と黒がベースの服なの。だから、これちょっと借りてくわ。」

真亜はペンダントを持っていった。

確かに似合ってはいたけれど、妖しい光りだった。

奏花は仕方なく舞台袖へ向った。

マネージャーというものをしたことがなく、よく分かっていない彼女だった。

一章、二部 逃避花 (前書き)

なんだか短い・・・。

一章、二部 逃避花

「本番いきまーす!!」

威勢のいい声でスタート。

真亜が出ているものは何かのバラエティーらしい。

バラエティーに來歌が出演するのは珍しいなと思いながらスタジオを見つめる。

母の姿を探したが何処にも居なかった。

いつも定刻になると言われている母が。不安になって舞台袖から玄関口へと向った。

途中、人とすれ違った長い髪を一つに束ね、サングラスをかけたスタイルのいい女性。

母を感じた。気付き、振り向いた時には既に女性はいなかった。

落ち込んでスタジオに戻ると、其処には優雅に椅子に座わり、司会者に反応する母の姿。

母の恋愛関係について話しているらしい。

「來歌さんは、気になる男性とかはいらっしゃらないんですか？」

司会者の言葉に予想していたかのような反応を示す。

「私には愛してくれるような男性はいらっしゃらないので私も愛そうとはしません。」

さらっと、完全否定した。凍るかと思った場の雰囲気だったが、客たちの反応が和ませる。

「來歌は俺が愛す!」「來歌を俺は愛す!」「來歌は僕を愛す!」

「來歌は「來歌が「來歌を

番組としてはいいことだと思う。耳を塞ぐ私がいた。

お父さんを、父を否定しているようで嫌だった。

愛したんじゃないの?愛されたんじゃないの?私は何のためにいる

の？

複雑な頭。ぐしゃぐしゃの心。

「真亜はいますよー！」

イキナリの関係ない突入。その声で來歌の視線は真亜に映った。真亜の胸元に。

「紅い、宝石。ガー、ネット。」

小さな声で紡ぐ。

「わ！來歌さんが、真亜のことに注目してくれるなんて、すごくうれいんです！ファンだったんです！來歌さんの！」

「奏花！？奏花なの！？ちがう・・・ちがう・・・」

一瞬で混乱し、崩れ始める來歌。

「あなた・・・それを何処で・・・ッ」

真亜は全く理解できていない。

混乱した眼で見つめた先に舞台袖。

「奏花！」

私は何故か逃げていた。逢いたかったはずの母から。

呼んで貰えた。覚えていてくれた。それだけで十分だった。

望んだものは大きいものだった。けれど、実際に欲しいと思ったものは小さいことだった。

充たされる感覚と、まだ残る欲求の感覚を胸に抱え、走った。

真亜に悪いなどとは思わなかった。

白い壁が永遠に思えた。

角を曲がって振り向いたら母は居なかった。

あの母がスタジオを放置して追いかけるわけがないと思いつつ、そうあって欲しいと思う私がどこかに隠れていた。

「奏花」

自分の名前、さっき母の口から出た言葉を呟き、頬に手を添える。顔が熱くなってる気がした。目の前にある鏡にも林檎のように紅い自分が見えた。

鏡の端、丁度私の右肩の上に被る辺りに画に描いたような美人。

「奏花」

もう一度鼓膜を揺らす。

心地いい。母の声。触れたかった肩。嗅ぎたかった髪。繋ぎたかった、手。

その手が差し出される。

いつの間にか目の前にきていた母。

「奏花」

差し出された手を、握った。

光へ。

一章、三部 咲花 (前書き)

うーん・・・。

長さのバランス悪い@

一章、三部 咲花

カメラの前に居ても動揺はなかった。

遺伝なのだろうか、役者魂なのだろうか、自分のキャラクターは頭の中で出来上がっていた。

清楚で飾り気のない美少女。それが私に課された役だと思った。

自分で言うのもなんだが、あの來歌の娘なのだから、それくらいの自信がないほうがおかしいと思う。

微笑んだり、話したり・・・アクション一つでどよめく会場が心地よかった。

私の意のままに操れる。そんな気がした。

しかし、それもすぐに幻想だと分かる。

真に操っているのは母、來歌だからだ。

所詮、私も彼女の手の上で転がされるだけの存在なのだ。

彼女は私をテレビに出すのに、「娘」という言葉を使わなかった。

「見かけた娘」、「來歌が見初めた娘」それだけで十分通じた。

ここにきて、より一層母の偉大さが分かった。

それと同時に、母がいるこの芸能界に自分が存在していることが恥ずかしかった。

二度とテレビなんか出るか、そう考えていた。

後で放送された、この番組、私の名前は、萩原 奏歌。名前は一文字変わっただけで、苗字は母のものだった。

「萩原奏歌さん、デビュー前初出演。白崎來歌の知人か!？」

テレビ欄の補足に書いてあった。デビュー前もなにも、デビューする気は無いのだから、少し戸惑った。

そういえば、あのジャージの彼に会いに事務所へ行ったつもりが、会えずに帰ってきてしまったことを思い出す。

申し訳ないと言告げようと彼に貰ったものを見る。

・・・地図しか書いてなかったんだっけ・・・。

あの、衝撃的とも言えそうで言えない出会い。彼は名刺を忘れ、手書きの地図と、青いペンを押し付け足早に去ってしまったのだ。ペンは、と紙の下敷きになってしまっていたペンをだす。

“ 赤井 深穂 W I N S P R A T I O N 芸能事務所 スカウト班
E - M a i l a k a i . m i o n - s p s x x x x ”

ご丁寧にペンに印刷されていた。メールアドレスは恐らく彼個人のものだ。しかし、それ以外に連絡する術がないのでこちらも自分の携帯から送ることにした。もちろん、謝罪と、次の日程についてを。自分でも次の日程について、何故メールしたのかは分からない。ペン返したいし、と自分に理由をこじつけた。

メールは五分ほどで返ってきた。

眼が乾くほどの文面。びっしりの文字。

よく見たら似たような事ばかり。

「うちの事務所に来て欲しい」

そう。そんな内容をひたすらと。

もう、分かったって苦笑いしちゃうほど。

ああ、本気なんだって思った。

仕事だつて分かってる。けれど、本気になって私のこと考えてくれた人間は今まで何人いただろうか。

皆無。いないのだ。私などいつ死んでも変わりないと思っていた。地球に、宇宙に住む一人の住人。居なくなるだけで一日いくらかの二酸化炭素削減に繋がる。

私は、ここから消える前に、削減プロジェクトに協力する前に少し彼の希望に答えようと思う。

少しだけ。少し、だけ。

今だけは、少し。

「奏・・・奏ちゃん・・・」

メール文と向き合って恍惚としてた。

一体どのくらい経ったのか。自分でもよく分からなかった。

恐らく動いた時計の長い針は180度以上360度未満。時間の無駄をしていた。

階下より声が聞こえる。多分従姉妹の声。まだ中学生の、かつき香月の声。

従姉妹って言うのも、ここの家の本当の子供の娘。

だから血は繋がっていない。まだ顔にそばかすがあり、幼い娘。

私はこの子に勉強を教えていた。香月は学校にはあまり行かない。学校といっても養護学校だ。

香月は盲目だった。生まれつきではない。香月の母、えつき恵月さんと、香月の父で名前は知らない人と車で出かけているとき事故にあった。よくある話なのかもしれない。

そのとき飛び散ったガラスが、まだ眼の開いていない生まれたての香月の片目に突き刺さった。

香月の父は、その後の消息が不明で、恵月さんが車から香月を連れて死に物狂いで出てきたときに既に見失っていたと言う。

香月のもう片方の目はどうして見えなくなったかは知らない。一度、まだ私がここに来て少しの頃に聞いたことがあるが、悲しい目をして答えてはくれなかった。

その香月の母、恵月も現在出稼ぎに來たまま行方不明だ。私の周りでは行方不明が多すぎる。

香月は両目を覆う真っ白な包帯に何を思っているのだろう。

私は包帯を外した香月の顔を見たことが無い。きっと黒がちな瞳の奥に私と同じ、両親を探し求める翳りがあるだろう。そういう意味

では、唯一分かち合える苦しみをもつ仲間なのだ。

癖のある髪をなで目線を合わせる。目が白い布で隠れているから、何処にあるのか分からないけど、勘。

此処だつてわかった。

撫でていた筈の頭は知らないうちに私より高くなっていて逆に私が撫でられていた。

「奏ちゃん。どうしたの？」

何も知らないはずの香月に問われる。

「何かあつたでしょ」というような。私は何も答えず、目を閉じた。

ふわふわと揺れる雲の旅に出た。

さわさわと動く草道を。

甘い、落ち着く匂いを嗅いだ。

嗅ぎ慣れない匂いと、慣れて懐かしい匂い。二つ、あつた。

差し出された二つの手。

進むべき一つの道。

笑つてごまかした。

微笑みが、返ってきた。

カ
ナ
カ

囁かれた。

重なる二つの音、声。

私は、その声に導かれ、手を握り、道を進んだ。

右、左、前、後。

どこかわからない。

北、南、東、西。

どの方角かもわからない。

信じることもできなくて。

ただ、手を握った。

「奏ちゃん？もう夕方だよ？」

香月の声が頭上から降ってきた。

どうやら寝ていたらしい。

夢の中で問われた内容。誰だったのか覚えてない。

「なんの夢みてたの？」

香月はコロコロと笑う。

口調からも、仕草からも、もちろん眼からも読み取れない、香月の表情。

普通の人ならこれが香月が笑っているということに気付かない。けれど、私にはわかる。

香月と同じような苦しみを味わってきただからだと思う。

いや、実際香月自身も「笑う」という知識は皆無だろう。

自分がどうい感情なのか、香月には分かっていない。

この裏づけも先ほど同様。

とりあえず、私達が小さい頃から受けた傷は大きいものだ。

「夕飯、つくらなきゃ。」

香月じゃなくて、祖母が作るのだけど、そう言って香月は階下に行った。

・・・6時40分、17秒。受信ボックスに、一件。

差出人は、

赤井深穩。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489r/>

すかいそんぐす

2011年10月8日20時34分発行